

私の一首を探す旅

岩下 真理華

世の中よ 道こそなければ 思ひ入る 山の奥にも 鹿ぞ鳴くなる

私は小学五年生のとき、学校の授業を通して百人一首に出会った。その中でも当時一番好きだったのが、皇太后宮大夫俊成のこの歌だ。思い返してみれば、自分の前に伸びている道に気付かず、どう生きていけば良いのか思い悩み嘆き通したあの頃の私に、この歌はぴったりだった。自然豊かな地に生まれ育ったこともあってか、鹿の鳴き声が実際に聞こえてくるようだったのを覚えている。しかし百人一首の中で他に好きだった歌はせいぜい一、二首で、共感するものもそう多くはなかった。

私の中学校では、毎年一月に百人一首大会が行われる。私が中学一年生のときは小学生の頃に覚えた歌をまだ覚えていたので、特に勉強をせず本番に臨んだが、中学二年生の今はそれがうろ覚えになってきたので、百人一首の本をめくり、思い出そうとしてみた。すると、小学生の頃は特に心に残らなかった良暹法師のこの歌が、なぜか私の目を引き、心に強く訴えかけてきた。

さびしさに 宿を立ちいでて ながむれば いづこも同じ 秋の夕暮れ

あの晩秋の出来事を、私はこのとき瞼の裏に見た。夕暮れの頃ではないが、いつまで経っても眠れなかった静かな夜、虚しさから目を反らそうとして布団を飛び出した。窓を開けた。濁った私の心とは正反対に清新な冷気が肌を撫でた。暗闇の中、白く光る明かりが遠くに見えた。見下ろせば、闇に沈んだ枯野ばかりが広がっていた。私はこの歌を通して、あの瞬間のもの悲しさを再体験したのだ。ここに描かれているのは私のものと全く同じ経験ではないが、似通った構図、そして感傷が、きっと私の心を惹きつけた理由なのだろう。

もし百人一首がなかったとしても、ひょっとしたら人生のどこかのタイミングで冒頭に挙げた歌に出会えたのかもしれない。けれど、百首集まっていることで、その歌だけでなく他の歌にも目を向けることができた。時間とともに自分の好みは変わっていくので、好きだった歌をいつかは嫌いになってしまいかもしれない。逆もまた然りである。一首だけ見ていてそれを嫌いになれば、そのとき本当に自分が求めているものを見つけられずに終わってしまうかもしれないが、百首もあればきっと、いつもその中のどれか一首だけは好きでいられる。他の歌を好きになれなくても、その一首に心を揺さぶられ、共感し、心が救われれば良いのだ。

時間とともに自分が変わっていく中で、自分の今の「一」を見つけられる余地がある、そんな魅力が「百」にはあると私は考える。